

令和 4 年度 東京都立東村山高等学校 学校経営報告

校長 富川 麗子

自己評価の基準：【A】 十分達成できた 【B】 おおむね達成できた
 【C】 あまり達成できなかった 【D】 まったく達成できなかった

(1) 中期的目標と方策	令和 4 年度の取組と自己評価
【目標】近隣地域からの期待に応え、「他者（ひと）のために、一歩先の自分へ」のスローガンの下、幼・小・中・高・大の学校や地域との連携を深め、相互の教育力を活用し合い、将来、社会の変化に主体的に対応でき、社会貢献できる生徒を育成する。 【方策】 (1) 進学応援型エンカレッジスクールとしての指導体制の確立と教育システムの構築 ①「基礎学力・つまずき克服」、「読解力」、「コミュニケーション能力」、「自ら学ぶ力」、「キャリア設計・社会貢献意識」の 5 つの力の伸長。 ②特別進学クラスの特性の伸長と一般クラスの内容充実。 ③授業力向上や個に応じた教育支援等の課題解決のための校内研修の充実及び人材育成。 ④外部人材を活用した基礎学力の向上。 (2) 3 年間を見通したキャリア教育の充実 ①進路に対する明確な目的意識をもたせるため、第 2・3 学年に特別進学クラスを 1 クラスを編制。 ②高大連携・高大接続を目指した進路指導の充実。 ③多様性を尊重し、希望する進路を実現するための進路指導の一層の充実。 (3) 主体性、協調性、責任ある態度を身に付けさせる教育の推進 ①学校生活 12 のルールを確実に身に付けさせ、地域との連携を深めた教育活動とともに奉仕活動等、社会貢献活動の充実。 ②多彩な学校行事の推進と対外活動への支援。 ③ホームルーム、生徒会活動、体育祭、文化祭を通して、役割と責任ある集団づくりの推進。 ④自転車乗車マナー向上【自転車通学安全モ	(1) -①「学びの基盤プロジェクト」と若手教員研修を生かし、「読解力」「自ら考える力」に重点を置いた授業研究を進めた。また、小人数授業や習熟度別授業の実施により、エンカレッジスクールとしての指導体制の充実を図っている。また、各授業において双方向コミュニケーションを重視した授業、ペアワーク・グループワーク等、生徒の意見を引き出す工夫をした。 ②「特別進学クラス」の特色及びクラス編成方法等について「特別進学クラス PT」において特進クラス 2・3 年生にアンケートを実施し、現状の把握をし、今後の特進クラスの在り方について検討を進めた。 ③若手教員研修の授業研究への参加及び「学びの基盤プロジェクト」を活用し、他校で実施された研究授業に参加するなど研修の機会を確保した。 ④基礎・基本学習個別指導員を数学と英語の授業において活用し、特に下位層の生徒に対して、きめ細かな指導を行った。 (2) -①今年度は、2・3 年生のみに特別進学クラスを設け、本校における特別進学クラスの在り方について検討した。 ②2 年生全員が、夏季休業中にオープンキャンパスに参加した。 ③年間 4 5 回のガイダンスや講演会、模擬授業を実施した。 (3) -①問題行動の抑止を中心とした指導を行った。また、3 年ぶりに生徒会の生徒が近隣のボランティア活動に参加した。 ②コロナ禍以来、久しぶりの大きな学校行事を実施した。また、グラウンド改修工事終了に伴い、生徒が中心となって球技大会を企画・運営するなどした。 ③生徒の主体性を促しながら、感染症対策の徹底を図りながら学校行事等を行った。

デル校】・交通ルール遵守を通じて事故ゼロを目指す。 (4) 心と体の健康づくりの推進 ①部・同好会の活性化及び体力向上と帰属意識の高揚を図る。 ②継続的な体力向上に向けての取り組みの遂行。 ③「教育相談の充実」を目指し、スクールカウンセラー、ユースソーシャルワーカー、精神科の学校医との連携を図り、中途退学防止を図る。 ④特別な支援を必要とする生徒へ配慮した基礎的環境整備の充実。 (5) 組織的な学校経営と経営企画室の学校経営参画の促進 ①全教職員の協働体制の構築及び企画・立案を積極的に行い、所属職員の意識向上を図る。 ②企画調整会議を軸とした学校経営・全教職員の協働体制の構築。 ③学校運営連絡協議会による学校関係者評価に基づいた、学校経営の改善。 ④予算編成と施設・設備の整備の充実。 ⑤「働き方改革」を推進し、育児中の職員のキャリア形成の促進と介護・仕事の両立支援を図る。 ⑥本校の特色をPRするための広報活動の充実。	④「命の大切さを学ぶ教室」と題して、交通事故遺族の方を講師として交通安全教室を実施した。 (4) -①グラウンド改修工事で、グラウンド使用の部活動においては制約があったものの、外部の施設を活用し、工夫して活動することが出来た。 ②体育施設に制約はあったものの、3年ぶりにロードレース大会を開催し、生徒の体力向上と体会へ向けての練習を積み重ねることの重要性などを学ぶことが出来た。 ③SC・YSWとの打ち合わせを毎月、また教育相談委員会を2回開催し、課題の共有を図った。 ④コミュニケーションに課題のある生徒に対して、SSTを実施するなどの取り組みを行った。 (5) -①年度当初の組織目標設定、学期毎の取り組み及び課題の整理を全分掌・学年・教科で行い、進捗状況を把握することが出来た。 ②企画調整会議を毎週実施する体制を整えた。 ③学校評価アンケートの教職員の回答者は100%（昨年度93%）であった。 ④執行計画に基づいた適切な執行管理を行った。 ⑤「子育て」「介護」等について理解と相互支援のある環境となった。 ⑥学校案内パンフレットをリニューアルし、東村山高校の温かなイメージにした。 【自己評価 B】
(2) 本年度の教育活動の取組内容	自己評価
(1) 教育課程・学習指導 ①一人1台端末の活用 ア オンライン学習を活用した対面授業やクラウドを活用した意見交換・発表の充実。 イ Teams 活用やコロナ禍の遠隔授業への対応等、BYOD、CYOD 導入に対応した学習指導の推進。 ②観点別評価（3観点）の実施 ア 指導と評価の一体化を図る。 イ 第1学年における3観点評価実施。 ③計画的な朝学習・朝読書、体験学習、学力向上	(1) -①デジタルサポーターの支援など受けながら、「Teams」による連絡事項の配信、日々の教育活動において、オンラインを効果的に活用する教科が増えてきた。また、学年教務を中心に、統合型校務支援システムの校内版マニュアルの作成が進んだ。振り返りや小テストに forms を用いることでデータの集約のスピード化を図ることが出来た。一方、選択肢を用いた小テストにおける生徒の学力定着について、更なる検証が必要である。また、生徒の情報を管理・確認する方法について共通理解を深め、生活指導や進路指導に役立てることが課題である。 ②観点別評価に関して、各教科で検討しながら取り組むとともに、教育課程員会において校内で共通理解を図りながら検討した。次年度にむけてブラッシュアップを図る必要がある。 ③朝学習・朝読書については、PTにより次年

研究校（校内寺子屋）事業の充実。 ④「学びの基盤」プロジェクトによるプログラム検証。 ア 「読解力」と「自ら学ぶ力」を育成する指導法を開発・研究・検証。 イ 社会生活を送る上で、最低限必要となる読解力を高める教育プログラムの開発・研究。 ウ 生徒の多様性に着目した基礎学力を高める教育プログラムの研究・開発。 ⑤個に応じた指導・支援の充実 ア 教育力向上を図るため、自立支援活動チームと通級学級コアグループとの連携及び活用の充実。 イ 中学校からの生徒情報共有シート等の活用と合理的配慮に基づいた指導の充実。 ウ 学力向上研究校（校内寺子屋事業）による主体的に学習する態度の育成。 エ ユニバーサルデザインの視点による教育環境の整備。	度に向けて検討を行った。放課後学習に関しては、一部、校内寺子屋事業を活用した。 ④若手教員研修を中心に、「読解力」と「自ら学ぶ力」を育成する指導方法等について研究を進めた。研究授業を年間19回実施し、他教科の授業を参観する等授業力の向上を図ることが出来た。また、このプログラムを活用し、参加校同士の授業研究に双方で参加し、学ぶ機会を得た。また、「基礎・基本学習支援員」により、サブ・ティーチャーとして英語・数学の授業時間内に活用を図った。更に、習熟度別授業では、数学において2クラス4展開することで、特に、上位層と階層に対してきめ細かい指導を実施することが出来た。学校評価アンケートにおいても、「授業は分かりやすく、先生方は教え方や教材を工夫している」と肯定的な回答が各学年とも8割以上となっている。 ⑤スクールカウンセラー、ユースソーシャルワーカー、自立支援担当、特別支援コーディネーター等との連携を図り、個々の生徒の情報について共通理解を図り対応することが出来た。また、少人数授業や習熟度別授業の実施し、さらに東京都の事業の一つ寺子屋事業を活用して、学習支援員という形で外部人材を活用した。 【自己評価 B】
（2）進路指導 ①「進学応援型」の充実 ア 第2学年進級時からの特進クラス設置。 イ 特進クラス及び一般クラスの内容充実。 ウ 高大接続改革に向けた対応。 エ 放課後や長期休業期間中の補習・講習の充実。	（2）－①今年度入学生から、特別進学クラスの設置は2学年からとした。そのため、特進クラスの基準等について検討をした。また、大学や専門学校の情報共有に務めた。更に、2学年向けの看護・医療系の小論文講座を実施した。 【自己評価 B】
（3）生活指導 ①中途退学防止（全員進級・全員卒業）の実現及び体罰根絶、いじめの未然防止の徹底。 ②「Sport-Science Promotion Club」の指定（バドミントン部及びビームライフル部）を核とする部活動の活性化。 ③「学校生活12のルール」の指導徹底	（3）－①3学年については、4月の進級者全員が卒業することが出来た。また、体罰やいじめの実態把握を行い、未然防止に務めた。 ②ビームライフル部は関東大会出場、バドミントン部男子団体は、東京都の公立高校で優勝と健闘した。 ③特別指導の件数は例年より多い状況となった。挨拶・服装指導、頭髮指導、遅刻指導等、年間を通して粘り強く指導を行った。 【自己評価 B】
（4）心身の健康づくり ①感染症防止対策に留意した健康観察等の継続。 ②「TOKYO ACTIVE PLAN for students」に基づく体力向上を図る。 ③スクールカウンセラー、ユースソーシャルワーカーとの連携充実及び生命尊重の充実。	（4）－①Formsによる健康観察、消毒薬・石ケン等の管理、保健だより等での啓発活動を行うことで、校内での感染防止対策を図り、継続した教育活動を行うことが出来た。 ②ロードレース大会を3年ぶりに開催するなど生徒の体力向上に務めた。

④特別な支援を必要とする生徒への合理的配慮の充実。	③定期的な打合せ及びスクールカウンセラーによる講演会実施、更には精神科医との連携を深めることができた。 ④特別支援コーディネーターを中心に、個別の検討を行うなど対応した。 【自己評価 B】			
(5) 新校舎はじめ新施設の活用とグラウンド整備工事への対応 ①教育施設の十分な活用と工事中の防災対策及び校内安全対策の充実。 ②新グラウンド造成により教育環境の整備を図る。 ③校外の体育施設の積極的利用（例；体育祭における府中陸上競技場の利用）に関する必要措置。 ④ 施設・設備の点検と維持管理の強化及び安全管理と事故防止への取り組み。	(5) -①グラウンド工事定例会議を隔週で実施。工事の実施状況の把握等に務めた。 ②体育の授業については、限られた施設を有効に活用して実施。部活動については、グラウンド使用種目については、校外の施設を活用しての活動となったが、計画的に実施することが出来た。 ③4年ぶりに実施した体育祭、3年ぶりに実施したロードレース大会も外部施設を活用しての実施であったが、滞りなく行うことが出来た。 ④受水槽の不具合が生じたが、速やかに関係機関と連携を図り、改善することが出来た。 【自己評価 A】			
(6) 組織体制の強化と働き方改革 ①PDCAサイクルに基づいた学校経営。 ②経営企画室と一体化した学校経営を目指し、経営企画室のさらなる経営参画の促進。 ③新型コロナウイルス感染症の対応と教職員の健康管理の徹底を図る。 ④点検・環境整備・研修等を通して個人情報・情報セキュリティの適正管理を図る。 ⑤生徒・保護者・その他都民に対する親切かつ丁寧な接遇の実施。 ⑥教員との緊密な連携による効果的かつ正確な事務を遂行し、募集対策・入学者選抜の運営及び支援を行う。 ⑦育児休暇取得経験者等を講師とする子育て研修会をはじめとして、働き方改革研修会を開催。	(6) -①学期ごとに目標に向けた取組状況を確認し、課題の整理に務めた。 ②4者打合せを毎朝実施し、情報共有により課題への速やかな対応に務めた。 ③毎日の健康観察及び入選前等のPCR検査の徹底を図り教育活動を継続して行うことに務めた。 ④定期的な服務研修及び機会を捉えての周知により適正管理に務めた。 ⑤電話対応等、丁寧な対応に務めた。 ⑥新たな出願方法であるインターネット出願について、選考委員会を中心に入学選抜業に取り組んだ。また、募集対策については、中学生及び保護者に分かりやすく丁寧に行うことで、連年より応募倍率が上回った。 ⑦計画的な育児休業取得者が複数名いるなど、ライフワークバランスの推進に務めた。 【自己評価 A】			
(3) 数値目標				
項目	内容	目標値	今年度	達成度
1 学習指導	(1) 校内寺子屋出席率（基礎学力の定着）	90%以上	76%	C
	(2) 一人1台端末活用に向けた校内研修等	年3回以上	2回	C
	(3) 観点別評価に関する研修会等	年3回以上	5回	B
	(4) 長期休業中の補習・補講の実施	30講座以上	25講座	B
	(5) 図書貸出冊数（図書館利用活性化）	3000冊以上	2848冊	B
	(6) 漢字検定・英語検定（3級以上）	30名以上	14名	C
2 進路指導・生活指導	(1) 進路実現に向けたガイダンスや講演会	20回以上	45回	A
	(2) 進路決定率	90%以上	87.6%	B
	(3) 基本的生活習慣の確立（中退・転学）	15名以内	27名	C
3 心と	(1) TOKYO ACTIVE PLAN for students	20回以上	30回	A

体の健康	(2)「Sport-Science Promotion Club」	関東大会出場	関東大会	A
	(3) 通級学級コアグループ・自立支援活動チームの戦略会議等	月 1 回	月 1 回	A
4 募集 対策	(1) ホームページ更新	200 回以上	399 回	A
	(2) 若鳩だより	5 号以上	5 号	A
	(3) 入選倍率	中進対 1.4 倍 推薦 3.5 倍 前期 1.4 倍	1.42 倍 4.2 倍 1.75 倍	A
5 組織 体制	(1) PDCA サイクルによる学校運営の見直し	年 3 回	学期毎	A
	(2) 月当たり時間外勤務 45 時間を超える教員	0 (ゼロ) 人	9 人	C
	(3) 年休 5 日以上取得	全教職員	98%	A
	(4) 一般需用費センター執行割合	60%以上	72.9%	A
(3) 次年度以降の課題		対応策		
【実際の教育活動に生かす】 2 月にグラウンドも完成し、施設・設備は整った。4 月以降は、施設・設備を有効活用し、エンカレッジスクールとしての充実した教育活動を展開していく。 【募集活動の更なる充実】 今年度は、グラウンドが工事中のため部活動の紹介など一部出来なかった。次年度は、施設を有効に活用し、エンカレッジスクールの特色を発信し、募集人員の確実な確保を図る。		① 授業計画・指導方法の充実を図る。 ② 施設を地域との連携に活用し、地域の教育力を活用しながら、生徒の学習活動の充実を図る。 ③ 進学応援型エンカレッジスクールとして、3 年間での生徒の伸長について、他校のエンカレッジ校のモデルとなる教育活動を構築していく。 ④ 授業公開、体験授業などを積極的に実施し、中学生、保護者、中学校教員に対してエンカレッジスクールの理解を深めてもらう機会とする。		